様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１６６２９

研究課題名（和文）精神科での臨床研修における研修医の学びの多面的解析

研究課題名（英文）A multi-faceted analysis of residents' learning during postgraduate clinical training in psychiatry.

研究代表者
松坂　雄亮（Matsuzaka, Yusuke）

長崎大学・医歯薬学総合研究科（医学系）・客員准教授

研究者番号：３０７２８９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　2020年4月から2年間にわたり、長崎大学病院の精神科をローテートする研修医に対して、ローテート開始時と終了時に質問紙調査を実施した。合計で99名の研修医から回答を得た。ローテート終了時、精神科関連の研修到達目標に対する理解度や初療に当たる際の自信が向上した。また、研修医は精神疾患に対して好意的なイメージをより強く持った。さらに、多職種連携に対する準備状態が向上した。
　精神科をローテートすることで、研修医は多面的な学びを得ていることが明らかとなっており、精神科研修の必修化は意義深いものであり、臨床研修制度と医師養成に大きく貢献できるものであると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現在の医師臨床研修指導ガイドラインにおいて、精神科ローテートは必修とされているが、具体的に精神科でどのような学習をするべきか、あまり具体的に書かれてはいない。本研究を通して、研修医が精神科ローテートを通してどのような学習ができているかを明らかにした。精神疾患に対するイメージや、多職種連携への姿勢など、研修後にどの専門に進むかに関わらず共通して求められるであろう態度を、精神科での研修を通して身につけることができていると思われた。

研究成果の概要（英文）：We conducted questionnare survey among postgraduate residents who undertook rotation in the psychiatry department at Nagasaki University Hospital across two academic years from April 2020. In total, 99 residents responded to this survey. Residents appeared to improve their understanding and confidence in initial treatment of psychiatry-related competency items. Residents can acquire a more positive perception towards psychiatric disease. Residents exhibited increased readiness toward interprofessional learning.
　Mandatory psychiatry rotation is reasonable and worthwhile, and may constitute an essential and effective part of the residency curriculum.

研究分野：医学教育

キーワード：教育効果　臨床研修　精神科

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2020 年度より新たな医師臨床研修制度が開始となり、精神科は 4 週以上の研修が必修となった。これは、精神科研修を通して身に着ける素養を、すべての医師が有していてほしいという、社会からの要望と捉えることができる。ただし、その素養がどういったものであるかは、はっきりとしていない。臨床研修指導ガイドラインには、精神科研修について、「精神保健・医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応するために、精神科専門外来又は精神科リエゾンチームでの研修を含むこと。なお、急性期入院患者の診療を行うことが望ましい」と記載されているのみで、学習内容について具体的な言及はされていない。臨床研修の到達目標として、研修中に経験すべき症候や疾患が設定されているが、2020 年度からの研修制度において全体の項目数は減少している。一方で、精神科関連の項目については、従来制度からある「統合失調症」や「認知症」に「もの忘れ」「興奮・せん妄」「依存症」などが新たに加えられており、むしろ項目数としては増えている。研修医が経験した内容に関しては、指導医や研修管理部門によって評価がなされるが、診療を経験したことを確認するまでが限度である。研修医自身の目線で「何を学んだか」が抽出されるような研究はこれまでほとんどなされてこなかった。

また、精神疾患に対しては偏見や差別等に関する社会的問題がしばしば指摘される。特に日本の一般市民は精神疾患に対する否定的な見方が他国と比して強く、精神疾患を「本人の弱さによるもの」と捉える傾向があり、精神医療を受けることへの抵抗につながってしまう。医療の場面においても同様で、精神科に通院中の患者というだけで、救急搬送時における搬送先選定までの時間が長くなるといった問題が発生する。こうした背景から、精神科の臨床教育を組み立てる際の問題意識として、精神疾患に対する偏見の是正に焦点を当てることも多い。精神疾患に対するイメージを研究したものは過去に多くあるが、ほとんどがコメディカルスタッフを対象とした研究であり、医師を対象としたものは非常に少ない。

精神科の医療現場では、看護師・作業療法士・精神保健福祉士・薬剤師といった多職種との連携、介護関連をはじめとした地域の社会資源との連携が豊富であることが１つの特徴と言える。昨今の医学教育において多職種連携教育の重要性が強調されている中で、新たな医師臨床研修制度でも多職種による 360 度評価が必須となったが、画一的な形式にならざるを得ない。医療現場における研修医の多職種連携に対する主体的な態度を評価するためには、それだけで十分とは言いがたい。

このように、精神科での研修は、前述したような特徴から、各疾患の診療にとどまらず、「患者医師関係」や「チーム医療」などといった、「医療人として必要な基本姿勢・態度」に関する深い学習が期待できる。精神科での研修を通して研修医たち自身が何を学んだと認識しているのかを多面的に知ることで、必須診療科である精神科研修を通して多様な学習経験が得られていることの示唆が得られると推測される。しかしながら、そのような研究はこれまでほとんどされてこなかった。

２．研究の目的

前項の背景を踏まえ、2020 年度から 4 週以上の必修となる精神科研修を経験することで、研修医自身の主観ではどのようなことを学んだと認識しているのか、また精神疾患に対するイメージがどのように変化するのか、そして研修医の多職種連携に対する態度がどのように変化するのかを明らかにすることを目的に本研究を実施した。

３．研究の方法

2020 年 4 月から 2022 年 3 月までの 2 年間、長崎大学病院精神科で臨床研修を受けた研修医 105 名を対象に、精神科研修の開始時と終了時に質問紙調査を実施した。調査内容は、2020 年度からの臨床研修制度において経験すべき症候・疾患のうち精神科との関連が強い項目(一部 2019 年度以前の項目も含む)に対する主観的な理解度および初療に当たる際の自信をそれぞれ 6 段階のリッカートスケールで問うもの(図 1)、精神疾患に対するイメージを Semantic Differential 法を用いて 20 項目の形容詞対の間を 7 段階で評価するもの(図 2)、多職種連携学習に関する準備状態を Readiness for Interprofessional Learning Scale (RIPLS)日本語版(図 3)を用いて評価するものの 3 種類を行った。

以下にあげる「経験すべき症候」「経験すべき疾病・病態」それぞれについて、あなたの主観的な理解度がどのくらいか、また初療に当たる際の自信がどのくらいか、1～6のうち最も近いところに○をつけてください。

		最も低い 1	2	3	4	5	最も高い 6
依存症（ニコチン・アルコール・薬物・病的賭博）	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
気分障害（うつ病、躁うつ病を含む）	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
興奮・せん妄	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
成長・発達の障害	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
統合失調症	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
認知症	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
不眠	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
もの忘れ	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						
抑うつ	主観的な理解度						
	初療に当たる際の自信						

図 1 主観的達成度調査

精神疾患に対して、あなたはどんな印象を持っていますか。左右に反対の言葉を、それぞれ7つの段階に分けてあります。自分の気持ちに一番近いところに○印をつけてください。日頃、あなたの思っている印象でお答えください。

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
暖かい								冷たい
単純な								複雑な
きたない								きれいな
暗い								明るい
陰気な								陽気な
安全な								危険な
悪い								良い
縁遠い								身近な
こわくない								こわい
遅い								速い
活動的な								不活発な
迷惑な								迷惑でない
役立つ								役立たない
はげしい								おだやかな
弱い								強い
容易な								困難な
浅い								深い
やわらかい								かたい
さびしい								にぎやかな
にくらしい								かわいらしい

図 2 精神疾患に対するイメージ調査

RIPLS日本語版（IPE学習レディネス尺度）
The Readiness for Interprofessional Learning Scale: RIPLS

		まったくそう思わない	そう思わない	どちらとも言えないわからない	そう思う	強くそう思う
Q1	他専攻の学生と共に協同学習することは，将来有能なヘルスケアチームのメンバーになるために役に立つだろう	1	2	3	4	5
Q2	ヘルスケアを学ぶ学生が患者/クライエントの問題解決のために協同して学ぶことは，患者・クライエントに役立つ結果につなげられるだろう	1	2	3	4	5
Q3	他専攻の学生との協同学習は，将来実践における種々の問題を理解する能力を高めるだろう	1	2	3	4	5
Q4	資格取得前に他専攻の学生と共に学ぶことは，資格取得後の相互関係性を向上させるだろう	1	2	3	4	5
Q5	コミュニケーションスキルは，他専攻の学生と合同で学習するとより向上するだろう	1	2	3	4	5
Q6	他専攻との合同学習は，他の専攻（専門職）のことについて肯定的に考えるのに役立つだろう	1	2	3	4	5
Q7	合同学習で小グループでの課題学習をするには，学生はお互いに信頼，尊重することが必要である	1	2	3	4	5
Q8	チームワークのスキルは，ヘルスケアを学ぶ学生にとって必須である	1	2	3	4	5
Q9	他専攻との合同学習は，自己の（専門職の持つ）限界を理解するのに役立つだろう	1	2	3	4	5
Q10	他専攻の学生と合同学習することは，時間の無駄である	1	2	3	4	5
Q11	ヘルスケアを学ぶ学部学生には，他専攻との合同学習は必要ない	1	2	3	4	5
Q12	実践的問題解決能力は，自己の専攻の中でこそ学習することができる	1	2	3	4	5
Q13	他専攻の学生との合同学習は，患者/クライエントや他の専門職との意思疎通のために役に立つだろう	1	2	3	4	5
Q14	私は，他専攻との学生と合同で小グループによる課題学習の機会を積極的に受け入れられる	1	2	3	4	5
Q15	他専攻の学生との合同学習は，患者/クライエントの問題をより明確にするのに役に立つだろう	1	2	3	4	5
Q16	資格取得前に他専攻の学生と共に学ぶことは，よりよいチームワーカーになるために役に立つだろう	1	2	3	4	5
Q17	看護職や他のコ・メディカルの役割・機能は，主に医師のサポートをすることである	1	2	3	4	5
Q18	他専攻との合同学習では自己の（目指す）専門職の役割が理解できない	1	2	3	4	5
Q19	自分の専攻では，他の専攻の学生よりもっと多くの知識やスキルを習得しなければならないと思う	1	2	3	4	5

図 3 多職種連携学習の準備状態調査

４．研究成果

精神科に関連した研修到達目標項目に対する主観的な理解度および初療に当たる際の自信は、すべての項目について、研修後の得点が研修前より有意に上昇した(図 4，5)。精神疾患に対するイメージは、「暖かい」「明るい」「陽気な」「良い」「身近な」「こわくない」「にぎやかな」「かわいらしい」の 8 項目について、研修後のイメージが研修前より有意に強まった(図 6)。多職種連携学習の準備状態は、全項目の得点とサブスケール 1(チームワークとコラボレーション)の得点について、研修後の得点が研修前より有意に上昇した(図 7)。

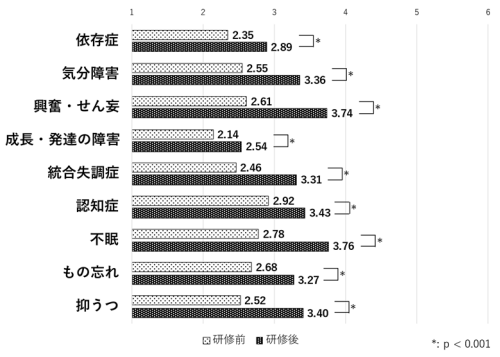

図 4 主観的な理解度

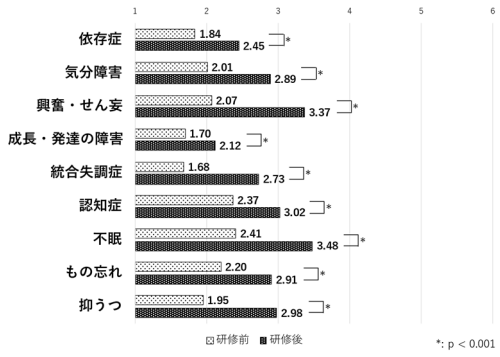

図 5 初療に当たる際の自信

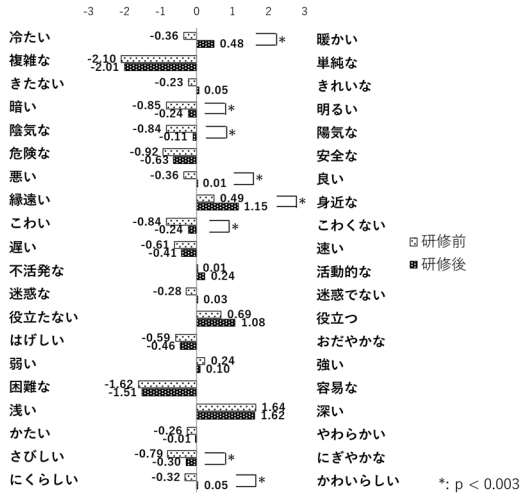

図 6 精神疾患に対するイメージ

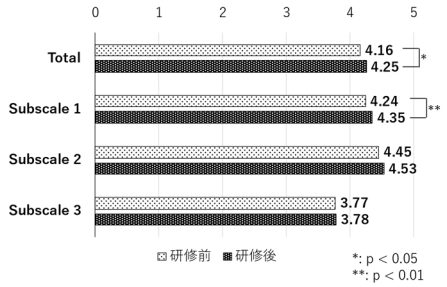

図 7 多職種連携学習に対する準備状態

精神科に関連した経験すべき症候や疾患は、精神科での研修を受けることで、研修医の主観的な視点から、有意義な学習経験になっていることが確認された。これらの項目は、将来どの診療科に進んだとしても広く一般的に経験する項目として設定されている。あらゆる診療科に進んだ医師がこれらの症候や疾患を適切に診療できるよう、精神科研修が寄与できていると推測される。

また、精神科研修を通して、研修医は精神疾患に対して好意的なイメージを持つ機会を得たと考えられた。並存する精神疾患があるために、救急医療を含め一般的な医療を受けるのに障壁が生じてしまう事態は現在も見受けられる。この状況の改善に向けて、精神疾患へのスティグマ軽減という観点から、精神科研修が寄与できる可能性が考えられる。

さらに、精神科研修を通して多職種連携学習に対する準備状態が高まることが示唆された。多職種連携はどの診療科に進んでも求められる重要な姿勢・態度の１つである。福祉的な側面が強く多彩な職種が協働している精神医療の現場に身を置いて研修を行うことで、多職種協働に向けた意識の向上につながることが期待される。

以上のように、精神科研修を通して研修医は多様な学習経験を得ていることが示唆された。必須診療科である精神科研修で学習できる多様な内容が、臨床研修指導ガイドラインの更新に際して、より具体的に反映されることを期待したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Matsuzaka Yusuke、Urashima Kayoko、Sakai Shintaro、Morimoto Yoshiro、Kanegae Shinji、Kinoshita Hirohisa、Imamura Akira、Ozawa Hiroki	４．巻 42
２．論文標題 The effectiveness of lamotrigine for persistent depressive disorder: A case report	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Neuropsychopharmacology Reports	６．最初と最後の頁 120～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/npr2.12228	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Matsuzaka Yusuke、Michitsuji Toru、Ozono Eriko、Matsushima Kayoko、Hamada Hisayuki、Morimoto Yoshiro、Kanegae Shinji、Kinoshita Hirohisa、Imamura Akira、Ozawa Hiroki	４．巻 76
２．論文標題 Significance of a psychiatry rotation for subjective achievement of competencies related to psychiatry in the Japanese postgraduate residency system	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	６．最初と最後の頁 63～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/pcn.13316	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Sakai Shintaro、Morimoto Yoshiro、Matsuzaka Yusuke、Nakano Takeshi、Kanegae Shinji、Imamura Akira、Ozawa Hiroki	４．巻 41
２．論文標題 Switching from blonanserin tablets to blonanserin transdermal patches improves tardive dyskinesia: A case report	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Neuropsychopharmacology Reports	６．最初と最後の頁 440～443
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/npr2.12200	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Takeshi Iwanaga, Yoshiro Morimoto, Naoki Yamamoto, Yusuke Matsuzaka, Shinji Kanegae, Akira Imamura, Hiroki Ozawa	４．巻 65
２．論文標題 Atypical schizophrenia with anti-N-methyl-D-aspartate receptor antibody positivity treated with modified electroconvulsive therapy.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Acta Medica Nagasakiensia	６．最初と最後の頁 63-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Matsuzaka Yusuke、Hamaguchi Yuko、Nishino Ayako、Muta Kumiko、Sagara Ikuko、Ishii Hiroyuki、Noguchi Ikue、Kuba Sayaka、Shiotani Yuji、Mine Takashi、Ichikawa Tatsuki、Ozawa Hiroki、Yasutake Toru、Kawarai Lefor Alan、Honda Sumihisa、Maeda Takahiro、Nagata Yasuhiro	4．巻 11
2．論文標題 The linkage between medical student readiness for interprofessional learning and interest in community medicine	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of Medical Education	6．最初と最後の頁 240～244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5116/ijme.5f89.83ae	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Yusuke Matsuzaka, Shinji Kanegae, Hirohisa Kinoshita, Akira Imamura, Hiroki Ozawa	4．巻 64(2)
2．論文標題 A local report of a psychiatric intervention at a COVID-19 clinical site: an intervention for patients and front-line medical staff.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Acta Medica Nagasakiensia	6．最初と最後の頁 69-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Yusuke Matsuzaka, Kayoko Matsushima, Hisayuki Hamada, Keeni Saraswati Krishna, Eriko Ozono, Atsuko Nagatani, Hirohisa Kinoshita, Akira Imamura, Hiroki Ozawa	4．巻 64(3)
2．論文標題 Impact of half-day clinical training in outpatient psychiatry on perception of mental illness by postgraduate interns.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Acta Medica Nagasakiensia	6．最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 松坂雄亮、道辻徹、大園恵梨子、松島加代子、浜田久之、森本芳郎、金替伸治、今村明、小澤寛樹
2．発表標題 精神科ローテートの有無が精神科に関連した研修到達目標の主観的達成度に与える影響
3．学会等名 第53回日本医学教育学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 松坂雄亮、大園恵梨子、松島加代子、浜田久之、森本芳郎、金替伸治、今村明、小澤寛樹
２．発表標題 精神科ローテートが研修医の精神疾患に対するイメージに与える影響
３．学会等名 第117回日本精神神経学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松坂雄亮、大塚俊弘
２．発表標題 新専門医制度の概略および長崎県の現状と課題
３．学会等名 長崎精神神経科集談会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松坂雄亮、谷保康一、道辻徹、大園恵梨子、松島加代子、浜田久之、森本芳郎、金替伸治、今村明、小澤寛樹
２．発表標題 精神科研修前後での経験すべき目標に対する研修医の主観的達成度の変化
３．学会等名 第34回日本総合病院精神医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松坂雄亮、大園恵梨子、清水俊匡、原口雅史、渡邊毅、松島加代子、金子賢一、小出優史、 高山隼人、長谷敦子、小澤寛樹、浜田久之
２．発表標題 初期研修医のための外来研修を精神科医が行うことによる教育効果(第2報)
３．学会等名 第52回日本医学教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松坂雄亮、永田康浩、小澤寛樹、浜田久之
２．発表標題 低学年の医学生に対する医療面接体験ゼミの教育効果の検証
３．学会等名 第52回日本医学教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松坂雄亮、長谷敦子、浜田久之、木下裕久、今村明、小澤寛樹
２．発表標題 単回の精神科外来研修が研修医の精神疾患に対するイメージに与える影響
３．学会等名 第116回日本精神神経学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松坂雄亮、酒井慎太郎、楠本鴻二郎、志方有莉、谷保康一、前田賢吾、福田亜紀、吉光慎治、大園恵梨子、松島加代子、浜田久之、金替伸治、今村明、小澤寛樹
２．発表標題 精神科リエゾンチームにおける研修医の経験内容に関する報告
３．学会等名 第33回日本総合病院精神医学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 松坂雄亮	４．発行年 2021年
２．出版社 じほう	５．総ページ数 31
３．書名 研修医・若手医師のための外来必携（分担：不眠・抑うつ・もの忘れ）	

１．著者名 松坂雄亮	４．発行年 2020年
２．出版社 長崎文献社	５．総ページ数 4
３．書名 在宅医療教育マニュアル（分担：高齢者を診察するときの注意点：精神医学的視点）	

１．著者名 Yusuke Matsuzaka, Shinji Kanegae, Hiroki Ozawa	４．発行年 2021年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 10
３．書名 NeuroPsychopharmacotherapy (Chapter: Antipsychotics/Neuroleptics: definition, classification, indications and differential indications)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関